

外国人観光客が押し寄せる時代に求められる体制づくり

堀 貞一郎 氏 日本観光学会顧問 / 株式会社エル・エー・シー会長

大阪万国博覧会などの企画プロデュースを担当、東京ディズニーランドの総合プロデューサーとして立ち上げに携わった経験を持ち、「人集めのプロフェッショナル」と呼ばれる日本観光学会顧問の堀貞一郎氏に、わが国の観光のあるべきかたちについてうかがった。

鎖国政策の延長線上

政府は観光立国という目標を打ち出しました。21世紀における観光の意義について、お考えをうかがいたいと思います。

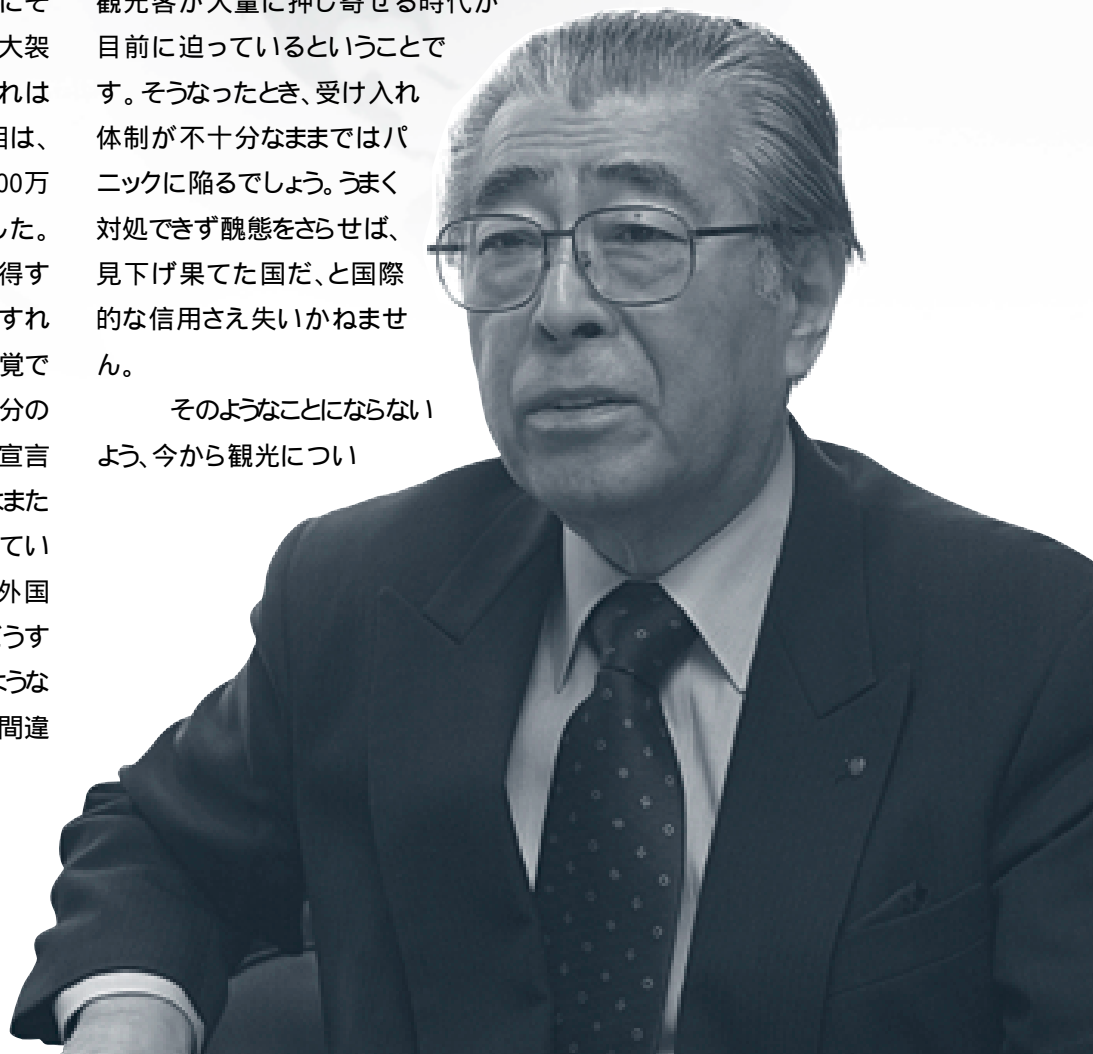
堀 日本という国家が、世界の中で次の時代を生き延びていく意思を示せるのか否か。私は、観光立国の成否にそれがかかっていると考えます。何を大袈裟な、と思われるのだとすれば、それは状況認識が甘すぎます。小泉首相は、外国人観光客を倍増して年間1,000万人にするという目標を提示されました。一般的には「倍増」という表現で納得する人が多いかもしれませんが、私にすれば、たかだか1,000万人か、という感覚です。さらに言えば、日本は1,000万人分の対策しか立てません、と入国制限を宣言しているようにも見えますし、日本はまたしても後手後手に回る、そう宣伝しているようにも見えます。日本は現在、外国人旅行者があまり来てくれない。どうすれば来てくれるようになるか、そのような議論の真っ最中ですが、近い将来、間違

いなく状況が大きく変わります。世界観光機関の予測では、2020年までに世界の国際観光客は16億人にのぼる、としています。注目すべきは、16億人という巨大な数字もさることながら、そのうち9億人が東アジア・太平洋地域で発生する、としている点です。当然、そのうち何割かは日本を目指します。つまり、外国人観光客が大量に押し寄せる時代が目前に迫っているということです。そうなったとき、受け入れ体制が不十分なままではパニックに陥るでしょう。うまく対処できず醜態をさらせば、見下げ果てた国だ、と国際的な信用さえ失いかねません。

そのようなことにならないよう、今から観光につい

てしっかり考え、きちんと対策を立てておくべきである、ということですね。

堀 まず問わなければならないのは、この国には本当に外国人を受け入れるつもりがあるのか、ということです。先日、日本を訪ねてきた外国の知人に、こんなことを指摘されました。空港に到着すると、目に付く所に「この国の法律を守ら



なければ、あなたは逮捕される」という旨の警告を発する看板が掲げてあった。私の知る限り、世界中の空港でそのような表示があるのは日本だけ。どうやら、日本は外国人を受け入れたがっていないようだ。分からないでもない。日本は世界一安全な国だったのに、外国人犯罪が増加しているのだから、と。彼は紳士ですから、理解できる、と言ってくれましたが、国の玄関とも言える空港でいきなり犯罪者扱いされるのは、決して愉快なことではないでしょう。

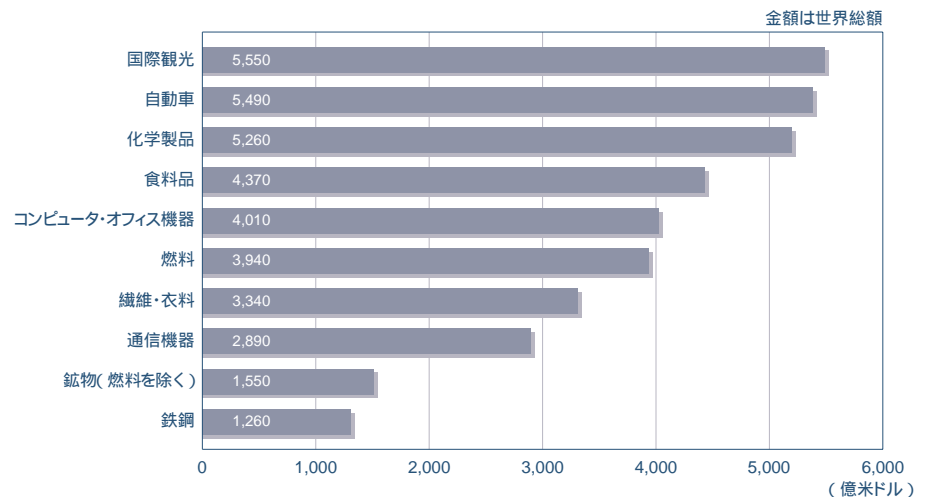
ビザの制度一つをとっても、日本にビザなし渡航を認めているいくつかの国に対して、政府は未だにビザを要求し続けている。それを海外から見れば、日本は外国人が入ってくるのを嫌がっているのではないか、島国の日本は、まるで国を挙げて鎖国政策の延長線上にあるかのようだ、そう理解されたところで不思議でも何でもありません。

「観光立国」という以前に、一人ひとりの日本人がその対応をかえりみるべきです。例えば、私が外国の街角で地図を広げていければ、すぐに“ May I help you? ”と声を掛けてもらえますが、銀座の交差点で外国人が地図を広げていても、ほとんどの日本人は素知らぬ顔で通り過ぎていく。英語で話しかけられると、「ノー、ノー」と言って逃げてしまう。

そもそも、積極的に受け入れる気持ちがないということですね。

堀 それで数字の上にはっきりと現れています。外国人観光客受け入れの国別ランキング(2頁・資料2参照)で、先進国はだいたい上位を占めています。当然のことです。先進国なら、国際収支の産業構造をバランスよく保とうとするものですから。ところが、日本だけは第33位と低迷している。日本は先進国だという無条件の前提のもとにもの考えていると

資料 主要商品分類別輸出額(1999年)



金額は世界総額
出所：国際観光振興会資料(2002年)
(原出所：世界観光機関、世界貿易機関、国際通貨基金)

理解しにくいかもしれませんが、バランスから見れば、日本は「金持ちの観光文化低開発国」なのです。

鎖国のような状態の中、観光の重要性がよく認識されていないと。

堀 経済的な側面でも、WTOの商品分類別輸出入額の第1位は「国際観光」です(資料参照)。ところが、日本の経済団体を見ても、トップクラスに観光産業の関係者が見当たらない。それも、観光を基幹的な産業として位置付ける視点が欠けていることの証しの一つとされます。要は、国の体質からして、観光立国とはほど遠いということなのでしょう。

代わり映えのしない都市

わが国において観光立国を実現するためには、どのような手立てが必要なのでしょう。

堀 いくつかのプロセスが必要です。一番目が法律で、二番目が行政のシステムの問題です。法律と行政が変わらない限り、民間も変わりようがありませんから。そして三番目が心の構造改革の問題であり、日本で重視されがちなハード

の問題は四番目です。

まず、法律の問題ですが、国を挙げて観光を重視する方針を明確にしたのはよいとして、であれば、観光に関連するあらゆる法律制度を改めて点検すべきでしょう。グローバル社会、ボーダーレス社会と言われる時代に、法律はそれに対応するかたちになっているか、法律によって障壁ができていないか、それを検証することです。同時に、シンガポール、オーストラリアなど多くの外国人旅行者を引き付ける国々の法制度についても、どこが優れているのかを比較研究すべきです。例えば、オランダのハーグにマドローダム¹という観光施設があります。敷地が手狭になり、移転を考えたのですが、移転の候補地が森でした。オランダではそのようなとき、伐採するのと同じ本数の木を別のところに植えなければなりません。緑の大切さをよく理解した上で、法的に規制しているのです。それに引き換え、日本は相変わらず開発優先です。もちろん、例外もあります。成功した観光地として知られる熊本県の黒川温泉などでは、地域の方々が緑を大切にされています。観光立国を目指すとき、日本の緑の豊かさは重視すべき資源で

急げ!
観光立国・ニッポン
~ 国際旅行収支、230億ドルの赤字 ~

1 マドローダム[Madurodam] : 宮殿や風車など、オランダ各地の有名な建物や町がすべて25分の1のサイズになった、ミニチュアタウンのテーマパーク。オランダのハーグ市にある。

あり、そのような観点からも、法律制度を見直すべきでしょう。

もう一つ例を挙げれば、私が東京ディズニーランドを誘致する仕事にかかわっていたときのこと、アメリカの本社の人間が、緑が大切だ、と非常にこだわるので、その理由を尋ねると、意表を突く答えが返ってきました。「私たちには、お招きしたゲストが排出する二酸化炭素を、同じ量だけ酸素に戻す責任がある」と。そして、1日に3~5万人のゲストがお出でになるとして、葉の面積から必要な木の数を計算して、60万本の木を植えよう、ということになりました。今やその木がすっかり成長して鬱蒼たる森です。仮に経営者が替わり、その森を伐採してアトラクションを増設していけば、おそらく、それに伴ってゲストは減っていくでしょう。人は木のある場所に集まるものなのですから。

まちづくりのあり方についても、何か不備があるとお考えですか。

堀 仙台駅で降りたとき、ふと福岡に来た錯覚を覚えることがあります。全国の都市が東京化して、個性が感じられない。特に、駅前には高度成長期とバブルの時代を経て、どこも似たような風景になってしまいました。同じようなペDESTリアンデッキに似たようなビルや看板。地方の有名な観光都市を訪れたとき、他の都市とまるで代わり映えのしない没個性の駅前に失望することもしばしばです。

まちづくりが中央集権的なかたちになっているのでしょうか。

堀 本当は、そのような状況にしないための仕組みをつくるべきでした。二番目に挙げた行政システムの問題にかかわってくるのですが、日本というベースをよく考え、その上に自分たちのまちの個性化を図るべきでした。逆に、ヨーロッパには、景観の規制が行き過ぎではないか、

という議論もあるのですが、一度失われた景観を回復するのは困難ですから、私から言わせれば、行き過ぎくらいでちょうどよい。

行政システムについてさらに望むところを言えば、本気で国の産業の柱として位置付けようという以上、所管する役所として観光省を新設すべきです。

第三の心の構造改革とは、具体的にはどのようなことでしょうか。

堀 先日、名古屋大学名誉教授の平出慶道先生とお話しましたところ、先生はタイによく行かれるのだそうです。以前、先生が観光でタイに行ったとき、通りかがりのおばあさんに道を訪ねたところ、とても丁寧に教えてくれたのでお礼を言うと、そのおばあさんは手を合わせて微笑んでくれた。その笑顔が何とも言えず素敵だった。それでタイという国をいっぺんに好きになり、以来頻りに訪れるようになった。タイを訪れると、いつも心が安らぐ、と。平出先生は、たった一人の笑顔をきっかけにタイという国のファンになり、リピーターになったわけです。

観光は何より、その国の人々の心が優先するということですね。

堀 人の心を癒す人の心こそ、最大の観光資源です。私自身にもこんな経験があります。私は、昔からよくヨーロッパを訪れていました。その途中、モスクワ空港に寄って給油することがありますが、時間を潰す気にもなれない。なぜなら空港は薄暗く、売店の女性はつつけんどん。社会主義圏うんぬんというより、そもそも肌が合わない、と旧ソ連によく印象を持っていませんでした。しかし先日、冷戦も終結したことだし、エルミタージュ美術館²などの観光資源を観てみようと思いつき、ロシアを訪れて、モスクワの地下鉄に乗ったのです。私と妻が乗りこむと、若い青年2人がさっと立ち上がり、ど

うぞ、と席を譲ってくれたのです。その瞬間、私の中のロシアに対するイメージが一変しました。

21世紀の観光は、モノの豊かさでなく、心の豊かさを求めるものになります。美しいものを観る。心地よい音楽を聴く。それも心の豊かさにつながりますが、最大のものは、何といっても人の心の美しさに触れることです。施設も大切ですが、それより先に精神的な受入体制を考えるべきです。訪れた外国人がリピーターとなり、母国に素晴らしい国だったと宣伝してくれる。それが、国の末永い繁栄につながります。反対に期待を抱いて日本を訪れてくれた人に不快な思いをさせてしまい、もう二度とあんな国には行かない、ということにでもなれば、信用失墜の最たるものです。残念なことに、日本への留学生が反日感情を強くして帰国することがあると報道されていますが、このままではアジアが大観光時代を迎えるとき、それと同じようなことが大規模に起きかねません。

世界は二輪車が常識

第四に挙げられたハードの面では、交通アクセスに問題があるのでは。

堀 東京を訪れたあるイギリス人に「私は以前からイギリス人は愚かだと思っていました」と言われたことがあります。理由を訪ねると「ロンドン中心部からガトウィック空港まで1時間近くかかる。飛行機は時間を短縮するために発明されたはずなのに、わざわざ時間のかかる場所に空港をつくっている。しかし、日本を訪れて日本人もイギリス人と同様に、愚かなことが分かりました」と。イギリス人一流のウィットで、やんわりと皮肉を言われてしまいました。ただ、成田空港が遠いと言われますが、私に言わせれば

2 エルミタージュ美術館：ロシアのサンクトペテルブルクにある美術館。女帝エカチェリーナ2世の宮廷博物館として、1765年に建築された。大理石宮殿の冬宮、3つの離宮、劇場から構成され、約270万点のコレクションが、約1,000の部屋に納められている。

羽田空港にしても遠い。私は年間70回以上の講演をこなしますが、そのうち40回以上が地方なので、羽田をよく利用するのですが、何しろアクセスが不便です。まず、自動車が使えない。途中が渋滞しているから到着時間が読めない。電車にしても、バリアフリー化が不十分で、荷物を抱えての階段の上り下りは大変です。また、通勤ラッシュを避けなければならないので、午後の飛行機を選ばざるを得ません。

ハードということでは、まち並みも観光資源だと思えますが、日本で、多くの都市で伝統的なまち並みが崩されています。

堀 もし、江戸のまち並みがそのまま東京に残っていたら、今ごろは世界中から観光客が殺到していたことでしょう。人間は、古いものに安らぎを見出す生き物です。景観に関しても、理に適った規制が必要です。それが難しい問題であることも事実ですが、先進国はきちんと取り組んでいます。フランスの景観法などをよく勉強するべきでしょう。ただし、ヨーロッパにしても、調べてみれば、実は多くの失敗例があります。伝統的な素晴らしいまち並みを潰してしまい、安手のアパートに建て替えるといった愚かな行為のため、せっかくの景観が損なわれ、観光都市として成り立たなくなったまちがたくさんあるのです。

ここで目を向けるべきは、そのような過去の行為への反省から、古い写真などの資料を元に、何とか昔のまち並みを復元しようとする試みが始まっていることです。今、ヨーロッパでは、そのようなまちを歴史遺産として認めてよいかという論議がありますが、仮に認められなくても、必ず大勢の人が訪れるでしょう。再生された美しいまち並みに魅了されるといってもありますが、何より、まちを再生

するため一所懸命に努力した地域住民の心が、人を引き寄せるはずだからです。それに対して日本には、古いまち並みを破壊したまま平然として憚らない都市が多い。すなわち、自分たちのまちや伝統文化を愛していないということです。

近代化を推し進めながら、心の部分を置き忘れたツゲが、今の状況に反映しているのでしょうか。

堀 明治以降、日本が近代化を推し進め、世界有数の工業国に上り詰めたことは素晴らしい成功であり、否定すべきことではありません。問題は、その次を考えていなかったことです。そのため目的を見失ってしまい、バブルの崩壊後、「空白」と呼ばれる時期を生じさせてしまった。「観光立国」と言われますが、私は観光だけの立国ではなく、「知的立国」ととらえるべきだと考えています。工業と観光・文化が21世紀における国家の車の両輪であり、そのバランスをとった立国を図るべきなのです。既に世界では、工業と観光・文化の二輪車が常識ですが、先進国のうち日本は乗り遅れてしまった。それが、国際観光客受け入れ者数ランキング第33位という惨めな順位として現れていると理解しなければなりません。

教育の問題も大きいとお考えですか。

堀 機械のつくり方、扱い方を教える。マニュアルでスキルを上げる。それが工業化社会における教育の基本でしたが、これからのコミュニケーション社会で相手にするのは、機械ではなく、千差万別の人の心です。そのとき、マニュアル教育だけでは通用しません。人の役に立つこと、喜ばれることが生きがいにつながる。そのような心のあり方や生き方についての根本を教え、啓発していくことです。しかし、日本では教育に限らず、

未だに発想の転換がなされていない。観光にしても、大切なのは施設の拡充だと錯覚されたままです。生産財がなければ富を生み出せない。そのようなハード中心の思考は、工業化の延長線上のものでしかありません。

何より大切なのはもてなす心であり、それさえあれば、おのずからホスピタリティは向上し、まち並みも美しく整っていく、ということですね。

堀 「ぜひわが国をご覧下さい」、そのように胸を張って言えるのが肝心です。国民が自国に誇りを持ち、自信を持って海外からのお客様を案内できるか。今、海外旅行客受け入れ数のランキングの上位を占めているのはそのようなことができて国々です。今、問うべきことは観光の経済波及効果などではありません。国民が本当にこの国を愛しているのか、将来にわたってこの国をきちんと存続していく気持ちがあるのか。知性的で心優しく、諸外国から尊敬されるような国家。国民が誇りを持てる知的国家を築き上げていく決意があるのか、そのことが問われているのです。

日本観光学会顧問 / 株式会社エル・エー・シー会長

堀 貞一郎(ほりていいちろう)

1929年東京都生まれ。1953年早稲田大学卒業、同年日本電報通信社(現・電通)入社。1962年総合プロデューサーに転じ、イベント、キャンペーンプランナー、プロデューサーとして活躍。1972年三井不動産関連事業部参事、株式会社オリエンタルランド取締役。1974年株式会社オリエンタルランド常務取締役、レジャー事業本部長。1978年東京ディズニーランド総合プロデューサー。1983年ランドアソシエイツ株式会社(現・株式会社エル・エー・シー)代表取締役社長、1990年同社会長。同年株式会社オリエンタルランド顧問。1992年青森大学客員教授。1999年山口県立大学客員教授。2001年日本観光学会顧問。著書に『メイド・イン・ジャパンからウエルカム・ツアー・ジャパンへ:観光立国が日本を救う』(プレジデント社・2002)、『楽しくなければ会社じゃない』(プレジデント社・2000)などがある。

読者の皆様のご意見・ご感想をお寄せください。

h-bunka@lec-jp.com



急げ!
観光立国・ニッポン

~ 国際旅行収支、230億ドルの赤字 ~